

フリウリ語における支え母音 -i — その発生と拡張の歴史 —

La vocale di appoggio -i nel friulano: le sue origini e lo sviluppo

山本真司

YAMAMOTO Shinji

0. はじめに 本稿の目的は、フリウリ語⁽¹⁾において語末の母音 -i がどのようにその分布を広げてさまざまな意味・役割を持つに至ったかを概観することである。この現象がいかんして注目されるようになったかを先行研究に基づいて紹介するとともに、さらなる調査・研究が必要とされるところと思われる問題点もいくつか指摘したい。

1. フリウリ語における語末母音 ラテン語からフリウリ語への発達の途上で、-A を除く語末の非強勢母音は脱落した。そのため、多くの単語で語末に子音が立つようになった。⁽²⁾

PEDE > pît 「足」、LACTE > lat 「乳」、NASU > nâs 「鼻」、BRACHIU > braç 「腕」、SALE > sâl 「塩」、VALLE > val 「谷」、CARNE > cjar 「肉」、MANU > man 「手」

しかし、その後の音変化のため新たに語末に母音が来るようになったケースがいくつかある⁽³⁾。その1つが、語末に立つさまざまな -i の場合である。そのなかでも、後続の音節が脱落したことにより語末に立つに至ったものは、(借用語や他の言語の影響によるものと比べて) より古くから存在していたと思われる。

MEDICU > miedi 「医者」、MONACHU > muini 「香部屋係」、STOMACHU > stomi 「胃」、FORMATICU > formadi 「チーズ」⁽⁴⁾

このような段階の -i は、まだ何か特定の機能を担っている「語尾」というわけではない。さまざまな単語で使われ、そこに何か共通の意味が見出せるわけでもなく、また、ただ単に語末に立つということだけでは「語尾」とさえ呼べないであろう(むしろこれらの場合 -i は語尾ではなくて語幹の一部をなすものと考えられる)。

しかし、まさに、このような状況(語末に問題なく許容され、なおかつ、特定の意味・役割との密接な関連を持たないという)こそが、これから見るように、「支えの母音」をはじめとして、さまざまな役割に広がっていくことを可能としたものと考えられている。

2. 支えの母音 ここで言う「支えの母音」vocale di appoggio⁽⁵⁾とは、ラテン語からフリウリ語に至る過程で、通常のように語末母音が脱落すると許容されない子音結合ができてしまうような場合

に、それを回避するために二次的に付加された母音 -i のことである。

例えば、次のような場合は、本来その位置に許容されないような子音結合 -dr-, -gl-, などが語末に残される危険がある。

PATRE > padre > * padr 「父」

GENUCULU > * genoclu > * zenoglu > * zenogl 「ひざ」

このような状況を回避するため語末に -i という母音が添加された。その後、-d-, -g- などの子音は消失する（その際、多くの方言では代償延長によりその前の母音が長くなるが、この長さは、音韻論的に重要な役割を持たないので、表記されないことがたびたびである）ことによって子音結合自体は解消するが、添加された母音 -i は残る。

* padr > * padri > pari

* zenogl > * zenogli > zenoli

ただし、変異名詞などの交替形においては、この消失した -d-, -g- が再び現れる。

zenoli ~ zenoglon （主に in zenoglon 「ひざまずいて」という句で用いる）

支えの母音として -i- が選ばれたのは、先に見たように、語末に問題なく許容され、なおかつ、特定の意味・役割との密接な関連を持たないという性格のゆえであったと考えられている。

なお、似たようなケースでも、女性名詞で語尾が -A であった場合は、この -A は脱落せず -e として残るので、支えの母音の付加が起こる余地は無い。

AURICULA > * oregle > orele 「耳」

この -i の付加という現象は、不正確ながら既に Marchetti (1952, pp. 62, 63) においても取り上げられ⁽⁶⁾、Iliescu (1972, p. 45) で明確に「支えの母音」と規定されるに至るが、その機能と広がりにより深く考察されるようになるのは、次に見る Benincà / Vanelli (1975) によってであった。

3. 動詞の語尾の -i 次に -i が問題となったのは、動詞の活用形との関連においてである。

フリウリ中部方言における第一活用動詞（不定詞が語尾 -â に終わるもの）の直説法現在の活用は次の通りである（以下、モデルとして、cjantâ 「歌う」の諸形を挙げることにする）。

1. cjanti, 2. cjantis, 3. cjante, 4. cjantin, 5. cjantâis, 6. cjântin⁽⁷⁾

一人称単数の活用語尾として -i が現れるが、この -i は、ラテン語の -O から直接発展したものとは考え難い⁽⁸⁾。なぜなら、先に見たように、ラテン語からフリウリ語への発達の上で、(-A を例外として) 語末の非強勢母音は脱落してしまっているからである。事実、フリウリ語の古い文献では、同じ位置で次のように -i が無い例もあることは既に Marchetti (前掲書, p. 63) によって指摘されている通りである。

jo ti damant 「私はあなたに尋ねる」、jo m'inamûr 「私は恋する」、jo acunsegl 「私は勧め

る」⁽⁹⁾

また、第二・第三・第四変化においては、期待されるとおり -O は脱落して、語幹末の子音が語末に立つに至っている。

o tās⁽¹⁰⁾「私は沈黙する」<不定詞 tasê

o viôt「私は沈黙する」<不定詞 viodi

o sint「私は沈黙する」<不定詞 sinti

Benincà / Vanelli (1975) は、フリウリ語の動詞の直説法現在形の分析にあたり、この語尾 -i の問題を取り上げた。この位置に母音が挿入された理由については、従来からさまざまな説が提案されてきたが、Benincà / Vanelli は、それらの1つ1つに反論していく。以下、簡単に紹介すると：

① Gartner (1910) による、人称代名詞が接辞されたという説。音声学的には不可能ではないが、歴史的な証拠が無く、裏づけとなる関連した言語現象がないと言う（それに対して、後に述べる Benincà / Vanelli の説は、歴史的傍証があり、名詞などの場合の現象と関連している）。

② Meyer-Lübke (1895) その他による、語末に許容されない子音結合を回避するために挿入されたものが類推によって他の場合にも及んだという説。既に Iliescu が反論を加えているが、それによると、そのような子音結合が生じる可能性のある文脈は頻度数が少なく（動詞全体の4%）、すべての動詞の活用に影響を及ぼすような力を持ち得ない。

③ Iliescu (1969), Iliescu (1970) による、接続法の形に由来するとする説。この説に対する反証の1つとして、接続法の語尾 (-AM, -AS, -AT, etc.) の母音 -A- が -i- とならない方言でも、一人称単数形の語尾が -i となっている事実が指摘されている⁽¹¹⁾。

なお、Marchetti (前掲書) はこの動詞語尾 -i の起源については明確な説明を行っていない⁽¹²⁾。

この問題の新しい解決策を探るにあたって、Benincà / Vanelli は、フリウリ語のこの母音の音色が、先ほど見た「支えの母音」と同じであることに注目した。さらに、支えの母音と同じ音色の母音が直説法現在一人称単数形の語尾に現れるという現象は、北イタリアからカタロニアに至る広い範囲で、フリウリ語と同じように語末母音の脱落を経験した諸語に広く見られる現象であることを確認し、この語尾と支えの母音との関係には偶然の一致以上の関係があることを示そうとした。

つまり、この位置に母音を挿入する必要が生じて、この場合にも選ばれたのが、支えの母音としても使われた、語末に立てる母音として確立していて特別な形態音韻論的な意味合いを持っていない、中立的な性格の -i という母音であった、という主張である。この母音 -i の挿入は、活用形のパラダイムにおいて生じた、諸形の間の一特に強語幹の諸形 *forme rizotoniche* (語根の音節に強勢が置かれている諸形) の間の一音節数の不均衡を解消するために置かれたものだと考えられる。つまり、1. *cjanti* とすることによって、2. *cjantis*, 3. *cjante*, 6. *cjàntin* の諸形と音節数が同じになるわ

けである。

ちなみに、中部方言以外に目を向けると、ゴリツィア方言などでは、この -i が、すべての種類の活用の動詞にまで広まり、一人称単数の標識として重要な役割を果たすに至っていることが知られている(特に、ゴリツィア方言では、接語形主語人称代名詞が動詞の前に立たないことが多いので、語尾は、人称の重要な特徴となる)。

さて、このようにして成立した一人称単数の語尾 -i は、おそらく類推により、動詞の他の変化形にも広がっていった。例えば、一見しただけでそれとわかる諸形を挙げると、単音節語幹動詞の直説法現在一人称単数形 (stoi 「私は ... である」 < 不定詞 stâ, doi 「私は与える」 < 不定詞 dâ, voi 「私は行く」 < 不定詞 lă, など), 直説法半過去一人称単数形 (cjantavi 「私は歌っていた」 — 規則的音声変化を経たならば CANTABAM > cjantave となるはずである), 接続法現在一人称単数形 ([che jo o] cjanti 「私が歌うように」), などがある。

-i がこれらの形にどのような経緯・順序で広まっていったかは、さらに詳しく調べる必要があろう。Benincà / Vanelli の考察は、規則活用動詞の直説法現在に限られており、また、同程度の精密さでフリウリ語の動詞活用体系全体を総括的に取り扱った研究はまだ存在しないようである。⁽¹³⁾

なお、遠過去形と未来形においても、別の経緯で一人称単数形の語末に -i が来ることになった — 遠過去形 cjantai 「私は歌った」 (おそらく -ai < -AI < -AVI, 語末の -I の扱いには問題があるが、類似の音声的文脈の例が見つからないので検討は難しい), 未来形 cjantarai 「私は歌うだろう」 (-ai は、もちろん、「私は持つ」の意味の *AIO に由来する) のように。そのため、偶然にも、直説法において、単純時制の一人称単数形はみな -i で終わることになった。こうなると、共時的には、現在形をも含めすべての単純時制を通じて一人称単数形を「語幹 + -i」のように分析することが可能ではないかとも思われるが、話者の意識の上でもそのような認識が存在するのかは、また別に検証する必要がある。

4. 借用語における -i また、母音 -i は、Vanelli (1986) で記述されているように、いくつかのケースで、借用語をフリウリ語に適応させるために使われるようになった。例えば、-ARIU はフリウリ語本来の語では -âr となるが、イタリア語などからの借用の場合、-ari という形で取り入れられる。

AQUARIU > agar 「(畑の) 溝」, しかし dizionario > dizionari 「辞書」

また、借用語において、普通、語末の -o は落とされるが、その際、語末に許容されない子音結合が残るのを回避するために -i が附加されることがある。これは、通時的に「支えの母音」に関して生じたことと並行していると思われる。

centri < centro 「中心」, teatri < teatro 「劇場」, cuatri < quattro 「(数字の) 4」⁽¹⁴⁾

dizionari のようなケースと centri のようなケースの間には相違点もある(後に見るように、前者

の場合、-i は語幹の一部であるが、後者の場合、-i は語尾であり、他の形態素が接尾されると脱落する) が、語末の処理がともに -i が語末に許容される母音であるという事実根拠をもっている点は共通していると言える。

5. -i は男性語尾か 母音 -i の機能の拡大に関するさまざまな先行研究にもかかわらず、いま少し詳しく見てみると、どのような機能が歴史的発達のどの段階で生まれたかについては、まだ十分に明らかにされていない点も少なくないように見える。

動詞に関しては、既に第三章の締めくくりでいくつか問題点を指摘したが、この章では、「支えの母音」という名称のもとに一括されてきたケースも、細部には微妙な相違点があるということをも、主に、名詞・形容詞の例について見てみたいと思う。

まず、次のような例：

pari 「父」、mari 「母」、

においては、mari が女性名詞、pari が男性名詞であるにもかかわらず、語尾は同じく -i である⁽¹⁵⁾。ここでは、語尾は性や数などの特に重要な文法的区別を担っているようには見えない。

それに対して、次のような例：

soreli 「太陽」、zenoli 「膝」、orele 「耳」、panole 「トウモロコシの穂」、

においては、明らかに男性名詞 soreli 「太陽」、zenoli 「膝」と、orele 「耳」、女性名詞 panole 「トウモロコシの穂」、の間に振る舞いの違いが見られる。これらの語はもともとすべて語幹末に語末では許容されない子音結合 -gl- を持っている (soreli ~ soreglut [縮小形]、zenoli ~ zenoglon、orele ~ oreglon 「耳の大きな人」、panole ~ panoglat 「トウモロコシの穂の芯」、のような交替を参照) が、語尾 -i を取るのは男性名詞だけで、女性名詞は女性の語尾 -e を伴っている。⁽¹⁶⁾

そのような傾向は、次のような形容詞の曲用においてはさらに顕著である。

altri [男性単数形] / altre [女性単数形] 「別の、もう 1 つの」

vieri [男性単数形] / viere [女性単数形] 「古い」

vieli [男性単数形] / viele [女性単数形] 「年取った」

このような段階に至ると、もはや、女性語尾 -e に対して男性語尾 -i を設定してもほとんど問題が無いのではないかという思いがする。また、vier- に関しては、vedr- (vedran 「独身の中年男性」) という交替形が一応存在するにしても、両者の関係の意識は薄くなっていること、vieli / viele では交替形はもはや vielut (縮小形) のようになり語幹の形の違いが現れない⁽¹⁷⁾ ことを考えると、-i が「支えの母音」として機能しているとはもはや言いがたいのではないか。

また、先ほど挙げた、centro > centri のように、フリウリ語への借用に当たって語末母音が落とされた後に、-tr- などの子音結合を回避するために改めて -i が付加された場合も、ほとんどの例が男

性名詞である。これは言うまでもなく、ほとんどの例で、最初にあった（そしてフリウリ語に入る段階で脱落した）語末母音が *-o* であったため、これらの名詞は言うまでもなくイタリア語では *-o* で終わる名詞の常として男性名詞であった（そしてそれゆえにフリウリ語でもそのように扱われた）からに他ならない。

このような場合に女性名詞の例が見当たらないという事実は、偶然の空き間なのかあるいは何らかの選択の意識が働いたのかには断言し難いであろう。しかし、結果としては、*-i* が男性の標示であるとの印象を強くするのに貢献しているように思える。

このように、語尾 *-i* は、その使用が拡大するにつれて、男性との結びつきが強くなっていく傾向があると言えそうである（もちろん、これには、男性そのものがもともと無標の性であることも関係していると言えらると思うが）。

6. 語幹の一部か語尾か 「支えの母音」について、さらに詳しい調査が必要であると思われるケースをもうひとつ見ておきたい。それは、その扱いに（中部方言の範囲内でも）個人差・方言差があるような例である。

支えの母音として後に付加された *-i* は、縮小辞 *-ut* の付加のように別の形態素が接尾されると、脱落する。しかし、語末の *-i* でも語幹の一部をなしている場合には、別の形態素が接尾されても、消滅せずに残る。

Pieri (人名) ~ Pierut, しかし, dizionari ~ dizionariut

ところが, fradi 「兄弟」の縮小形を *-ut* によって作るように求めると, 話者の回答には,

fradut, fradiut, fradilut⁽¹⁸⁾,

のように個人差がある。つまり、人によって、*-i* を語尾として扱ったり語幹の一部として扱ったりと、話者によって違いがあるのである。ちなみに、接尾辞 *-ot* を付けた fradeot 「弟」（筆者はカルニア方言で見つけたが、他の地域にも存在するかは不明）のような例もある（支え母音起源の *-i* が脱落しないのみならず *-e* に変化している）ことを考えると、このような揺れは必ずしも新しい傾向というわけではないようである。

なお, fradi の変異名詞形は自分にとっては存在せず, piçul fradi 「(字義的には) 小さな兄弟」のような分析的な言い方をする, と答える話者もいる。

7. ギリシャ語起源の女性抽象名詞の *-i* 最後に、本稿の本筋からはいささかそれるかも知れないが、語尾 *-i* を持っているもう一つの重要な単語のグループを取り上げておく。それは、ギリシャ語の抽象名詞 *-sis* に由来する、語末に *-si* を持つ一群の抽象名詞であり、その意味・形からして、イタリア語からの借用語であることが明白である。

simbiosi「共生」, sintesi「総括」, tesi「論文」

これらは女性名詞であり、先ほどの、フリウリ語では -i はますます男性名詞と結びつきつつあるという話と逆の動きになるが、それが話者の言語意識に何らかの葛藤をもたらしているかは定かではない。今までのところ、多くのフリウリ語話者は、これらの形を問題なく受け入れているようである。

Faggin はその辞書 (1985)・文法書 (1997) で、これらの名詞を、語尾を -i から -e に変えてフリウリ語に入れることを提案しているようだ (simbiose, sintese, tese のように)。そうすれば、これらの名詞は、語尾 -e をもつフリウリ語の女性名詞のグループの中にうまく溶け込むことになるが、この提案が広く受け入れられつつあるかどうかは定かでない。

8. 最後に 一定の文法的機能と特に明確に結びついていなかった -i という形態が、特定の意味を担う語尾となっていた過程は、フリウリ語の形態音韻論の重要な現象の幾つかを説明するとともに、いわゆる「文法化」の現象の格好な例でもある。

ここで取り上げたのは、コイネーおよびそれに近い中部方言のケースであるが、フリウリ全体の共通体系を踏まえた議論をするためには、他の多くの方言についても調査を行なう必要があるだろう。

ところで、これまで、フリウリ語は、書き言葉や言語規範の影響の少ない、いわば「自然な」状態におかれた言語であった。本稿で取り上げたのも、規範にはこだわらない、話者の現状に基づいた観察である。しかし、前世紀末から、フリウリ語教育を義務教育過程に導入することが始まり、書き言葉の影響は、ゆくゆくは無視できなくなるに違いない。ここで検討された現象についても、状況が変わっていくことであろう (特に借用語の扱いについてなど)。

そのため、従来の言語状況の記録は急務であるとともに、現在進行中の変化をも注意深く見守っていかなければならない。ここ数年フリウリ語が蒙りつつある社会言語学的状況の変化への対応 (語彙・文法・正書法面での規範の整備) の必要が叫ばれるなかで、ややもすると、地道に言語の実情の調査を行なうような仕事には必ずしも十分な注意が向けられていないように見えるのは、残念なことである。

注

- (1) 本稿では、主に、フリウリ語コイネーおよびその基礎となった中部方言を取り上げる。
- (2) 以下、本稿で使用した表記法は、Lamuella (1987) によって提案され、その後いくつかの修正を経て公式の正書法となり現在に至っている、標準化正書法に準拠したものである。
- (3) フリウリ語では、現在では、非強勢母音 -a, e-, -i, -o, -u はすべて語末に立つことができる (problema「問題」, cjavre「山羊」, zago「典礼の際の侍者」, reu「醜い」)。しかし、-a, -o, -u は、

主に、借用語によって広まったものであり、それ以前には、語末に立つことのできる非強勢母音は、ごく限られたものであったと考えられる。なお、-u は、西部フリウリ方言ではイタリア語やヴェネト方言の -o に対応するものとして借用語に出てくることが多いが、中部フリウリ語方言では非常に少ない。辞書に載っている形のうちあるものは、純正主義的な意図から編者によって造語された可能性もある。

- (4) それぞれ、さらに -A->-i- (語中の強勢音節直後の位置で起きる変化で, CASAS > cjasis 「家[複数形]」のように類例は多い) となり、それから語末の -CU, -CHU の部分が落ちたもの。ただし、その脱落のプロセスには問題がある。普通、母音間で -C- -G- は弱化してゼロとなると考えられている (IMAGINE > maine 「路傍の聖画」, HOROLOGIU > orloi 「時計」) が, stomi ~ stomegane 「胸焼け」, lûc 「場所」 ~ lughet 「同 縮小形」 などのように何らかの理由で -g- が残っている交替形の例も存在する。
- (5) 本稿では Benincà / Vanelli (1975) にならってこの呼び方をする。Haiman / Benincà (1992) では, paragodic vowel と呼ばれている。
- (6) Marchetti は、「語尾 -u は、子音 + l あるいは子音 + r (これらの子音結合が二次的なものであっても) の後では、脱落することができないので、-i に変わる」また「語尾 -em は ... (中略) ... 子音 + r に先立たれた場合、-i に変わる」(pari などの場合のことに言及して) と述べている。この母音 -i の存在が、語末に立つことのできない子音結合を回避するのに役立っていることは正しく理解しているようだが、この位置では「-u は -i に変化する」という言い方は、歴史的経緯と照らし合わせて問題が無いか、議論の余地があるであろう。
- (7) 数字は人称を示す(ただし、「... 複数」の代わりに、4., 5., 6., とした)。なお、後に見るように、実際には、これらの活用形は単独では現れず、かならず何らかの接語形の人称代名詞 (例えば主格形) を伴う。
- (8) -O->-i- という音色の変化自体がありえないのではない。ASTROLOGUS > strolc のような例があることはあり、これを、イタリア語の -logo に終わる諸語を借用する場合すべてに適用する話者もいる (例えば glottologo 「言語学者」 > glotolic, teologo 「神学者」 > teolic のように)
- (9) Marchetti は出典を明示していないが、Benincà / Vanelli (同じ例を引用している) によれば、14 世紀の「文法書断片」からの引用と思われる。さらに、同じく文法書断片より io am 「私は愛する」、14 世紀 (あるいは 13 世紀後半) の「フリウリ語ソネット」Soneto furlan から, jo chiat 「私は見出す」、chiò vos domànt 「私はあなたに尋ねる」、no vos domànt 「私はあなたに尋ねない」、のような例を挙げている。
- (10) 動詞に前置された o は、接語形人稱代名詞主格形である。
- (11) Collina と Vito d'Asio の方言では、第二・第三・第四活用においては、接続法現在形の語尾が、そ

- れぞれ, 1. -o 2. -os 3. -o / 1. -a 2. -as 3. -a であるが, 第一変化の一人称単数形 (直説法・接続法とも) の語尾は, どちらの方言でも -i であると言う。
- (12) 詳細な議論を展開することなく「ラテン語の第一変化動詞 (およびそれに同化された動詞) の直説法現在 1 人称単数の語尾 -o は -i に変わる」と述べるにとどまっている。
- (13) いわゆるレト=ロマンス諸語の動詞の活用体系について総合的・俯瞰的に取り扱っているものとして, Haiman / Benincà (前掲書) を挙げるべきかも知れない。しかし, この著作は, フリウリ語の支え母音について十分な取り扱いをしているとは言い難い。動詞の語尾 -i については, 一方で「一貫性への要請が, paragogic な母音 -i を導入させた」と言う一方, 「フリウリ語 ... は古いシュワから -e や -i を再構成した」とも述べている。
- (14) cuatri は, 基礎的な語彙ではあるが, 幾つかの理由で借用語であることが疑われる。そのひとつは, フリウリ語本来の語とは異なった音韻的变化 QUA- > cua- である (cfr. Quadriviu > Codroip [地名])。
- (15) この -i のような, 文法的な機能がはっきりしていないものを語尾と言って良いものか問題があるが, ここでは, 仮に語尾と称しておく。
- (16) 共時論はさておき, mari と orele のような区別は, 通時論的には, 言うまでもなく第三曲用と第一曲用の区別に由来する。つまり, PATRE, MATRE はどちらも語末の母音 -E が脱落して支えの母音 -i が付加されたのに対し, AURICULA のほうは, -A が保存されて -e となったのである。
- (17) もともと, vieli に対する交替形は, 縮小形 veglut に現れるように, -gl- を持った形であった。しかし, 現在では, 辞書には載っているこの veglut のような形が, 実際の用法 (辞書や文法書を参照している可能性のある執筆家のそれを除く) でどのくらい生き残っているか, 筆者は疑わしいと思っている。なお, 実を言うと, vieri, viele も, 口語では, かなりの規模で, 明らかに借用語の起源である vecjo / vecje にとって代わられつつある。
- (18) この fradilut の -l- は, 母音の衝突を避けるために挿入されたとも見えるが, あるいは, イタリア語の場合と類似した fradel- のような語幹に拠っている可能性も否定できないと思う。

参考文献

- BENINCÀ, Paola, *Friaulisch: Interne Sprachgeschichte. I: Grammatik. Evoluzione della grammatica*, in Holtus / Metzeltin / Schmitt (herausgegeben von), *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)*, 3. pp. 563-585, Niemeyer, Tübingen, 1989
- BENINCÀ, Paola / VANELLI, Laura, *Morfologia del verbo friulano : il presente indicativo*, in “Lingua e context”, I, 1975, pp. 1-62

- FAGGIN, Giorgio, *Grammatica friulana*, Ribis, Campoformido (Udine), 1997
- FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Del Bianco Editore, Udine, 1985
- FRANCESCATO, Giuseppe, *Dialettologia friulana*, Società filologica friulana, Udine, 1967
- FRAU, Giovanni, *I dialetti del Friuli*, Società filologica friulana, Udine 1984
- GARTNER, Theodore, *Handbuch der rätoromanischen Sprache und Literatur*, Halle, 1910, cit. in BENINCÀ / VANELLI 1975
- HAIMAN, John / BENINCÀ, Paola, *The Rheto-romance language*, Routledge, London and New York, 1992
- ILIESCU, Maria, *Sur l'origine de la désinence de la première personne du singulier de l'indicatif présent dans les langues romanes*, in "Bulletin de la Société Roumaine de Linguistique Romane", VI (1969), pp. 61-66, cit. in BENINCÀ / VANELLI 1975
- ILIESCU, Maria, *Le présent de l'indicatif et du subjonctif en frioulan et la morphologie comparée*, in "Revue Roumaine de Linguistique" XV (1970), pp. 335-343, cit. in BENINCÀ / VANELLI 1975
- ILIESCU, Maria, *Le frioulan à partir des dialectes parlés en Roumanie*, Mouton, The Hague-Paris, 1972
- LAMUELA, Xavier, a cura di, *La grafie furlane normalizade*, edizioni de amministrazione provincial di Udin, 1987
- MARCHETTI, Giuseppe, *Lineamenti di grammatica friulana*, Società filologica friulana "G. I. Ascoli", Udine, 1952
- MEYER-LÜBKE, Wilhelm., *Grammaire des langues romane. II: Morphologie romane*, Paris, 1895, cit. in BENINCÀ / VANELLI 1975
- PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giov. Batt., *Il Nuovo Pirona. Vocabolario friulano*. Seconda edizione, Società Filologica Friulana, Udine 1992
- RIZZOLATTI, Piera, *Elementi di linguistica friulana*, Società filologica friulana, Udine 1981
- VANELLI, Laura, *Fonologia dei prestiti in friulano*, in HOLTUS, Gunter / RINGGER, Kurt, a cura di, *Raetia antiqua et moderna*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag 1986
- ASLEF, *Atlante Storico Linguistico Etnografico Friulano*, Padova-Trieste-Udine, Società Filologica Friulana, 1970-1986